

---

# 水車の側で

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水車の側で

### 【Nコード】

N4195V

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ノルマンディーから上陸した連合軍はオランダにまで入った。だがその水車の側でドイツ軍に囲まれ。水車を題材にしてみました。

## 第一章

水車の側で

第二次世界大戦後期。ノルマンディーから上陸した連合軍はドイツ軍からフランスを奪い返した。そしてさらにだ。オランダに入っていた。

その彼等はだ。今オランダの平野を進んでいた。

イギリス軍である。その独特の平たいヘルメットがそれを何よりも知らしめていた。その彼等がだ。英語でこんなことを話していた。

「オランダを越えたらだよな」

「ああ、いよいよだよな」

「ドイツ本土か」

「やっとそこまでいけるんだな」

ドイツはだ。まさに目の前だった。

そんな話をしながら周りを見回す。緑の平野の中にだ。水車達がある。

それが均等に並んでいる。それを見てまた話す彼等だった。

「オランダに来たって実感あるよな」

「ああ、そうだな」

「オランダだよな」

「ここってな」

「まさにそうだよな」

こう話すのだった。

「水車見ればなあ」

「しかし。こんな時でも動いてるんだな」

その十字の羽根がだ。ゆっくりと時計回りに動いている。それを見てだ。イギリス軍の兵士達はそこに妙なのだかを感じていた。

「戦争していてもな」

「農業はしてるか」

「そうなんだな」

このことにだ。それを感じていたのだ。

「何か不思議だよ」

「だよな。人も一杯死んでるのにな」

「こうしてここだけのぞかってな」

「不思議な話だよ」

こう話していくのだった。しかしだ。

ここで立派な制服の若い男が来てだ。こう彼等に告げるのだった。

「一旦停止する」

「あれ、ピット大尉」

「何かあつたんですか？」

「敵がいるとの報告があつた」

ピットはこう兵士達に話すのだった。

「それでだ。今はだ」

「停止して警戒ですか」

「そうするんですね」

「ドイツ軍はまだいる」

その敵である。いるというのだ。

「しかもこの辺りにな」

「戦車ですか？」

兵士の一人が言った。ドイツ軍の代名詞の一つともなっている戦車の強さはだ。彼等も骨身に染みて知っていることである。

「それがですか？」

「来てますか？」

「いや、戦車はないらしい」

それはないというのだった。

「だが。それでもな」

「敵はいるんですか」

「まだこの辺りに」

「だからだ。注意するんだ」

ピットはまた兵士達に告げた。

「いいな」

「了解です、それじゃあ」

「ここはどうしましょうか」

「そうだな。隠れる場所は」

ピットは周囲を見回した。そしてだ。

水車達を見てだ。こう兵士達に話した。

「あそこに隠れるか」

「水車にですか」

「そこにですか」

「そうだ、あそこにだ」

こう兵士達に話すのだった。

「あそこに隠れてそのうえでだ」

「戦いますか」

「ドイツ軍と」

「他に隠れる場所がないからな」

平野である。本当に何も無い。遠くまで丸見えだ。とりあえず敵の姿がまだ見えていないことがだ。彼等にとっては幸いだった。

## 第二章

「だからな。今はな」

「水車に隠れて」

「そうしてですね」

「敵を待ち受ける」

「気をつける。あいつ等の銃は凄いからな  
特に狙撃がなのである。」

「隠れていないと全滅だからな」

「ですね。あいつ等は強いですからね」

「絶対に諦めませんし」

「しぶといですよ」

そのことでもだ。彼等は定評があるのだった。

「イタリア軍なんて全然大したことないのに」

「何かっていうと逃げて」

「捕まえたらびーびー泣いて」

「楽な相手だったんですけれどね」

「あの連中はまた特別弱いからな」

ドイツ軍と比べればだ。彼等はそうなのだった。

「そう思うとアフリカは楽だったな」

「ですね。本当に」

「ロシヤは手強かったですけれど」

「イタリア軍もいましたから」

「連中狙えばよかったですから」

それと比べればというのだ。今は。

「ドイツ軍ばかりってというのは」

「幾ら勝っていても」

「洒落になりませんよね」

「じゃあ太平洋に行くか？」

ピットはそちらの戦線の話もした。この戦争は欧州だけで行われているのではない。太平洋でも激しい戦闘が続いているのだ。

「日本軍は装備は悪いがもつと凄いぞ」

「何か五百人いたら」

兵士達もだ。日本軍の話は聞いていた。それは。

「四百九十五人が戦死するまで戦って」

「後の五人は自決するんですたっけ」

「そんな戦争するんですよ」

「そうだ。ドイツ軍より凄いからな」

それが日本軍であり太平洋での戦争だったのだ。

「しかも最近はな」

「何か戦闘機に爆弾積んで突っ込んでくるんですよ」

「特攻でしたっけ」

「それしてくるんですよ、確か」

「そうだ。自分の命を捨ててくるからな」

それを聞いてだ。兵士達は苦笑いを浮かべてだ。口々にこう言うのだった。

「いかれてますね」

「死ぬのが怖くないんですか」

「戦争でも」

「らしいな。あれはあれで戦いたくない相手だな」

「全くですね、本当に」

「あの連中は」

そんな話をしていた。そうしてであった。

そんな話をしながらだ。彼等は水車の陰にそれぞれ隠れた。そうしてそのうえでだ。敵であるドイツ軍を待つのだった。

水車の中から見張る兵士がだ。下にいるピットにトランシーバーで報告してきた。

「来ました」

「そうか。数は？」

「およそ一個中隊規模です」

「そうか、数は同じか」

彼等もだ。一個中隊である。規模としてはまさに同じだった。それを聞いてだ。彼はこう言った。

「それならだ」

「はい、どうしますか」

「ここは」

「このまま戦う」

そうするといつのである。

「そしてそのうえでだ」

「奴等をですな」

「退けますね」

「そうだ、そうする」

まさにそうだといつのである。

### 第三章

「いいな、それで」

「了解です」

「それならここは」

「引かないでいきましょう」

兵士達もやる気だった。勝っているだけに士気が高い。開戦当初は劣勢だった彼等もだ。今は違っていた。勝利は目前だったのだ。

それでだ。彼等は確かな顔でだ。敵を待つのだった。

そしてだ。遂に彼等が来たのだった。

「見えてきたな」

「はい、そうですね」

「まずは」

「狙撃用意」

ピットは兵士達に命じた。

「狙撃兵、いいな」

「了解です」

「わかりました」

「敵はまだ気付いていないな」

「その様です」

物見の兵が答えてきた。

「けれど警戒はしています」

「そうか」

「行進ではなく散開して周囲を見回しながら進んでいます」

「やっぱりドイツ軍だな」

それを聞いてだ。ピットも敵を見た。するとだ。

実際にだ。彼等は慎重に周りを見ながら進んでいた。銃を構えそのうえでだ。そこには寸分の間も見られない。見事なまでにだ。

それを見てだ。ピットはまた言った。

「これは容易な相手じゃないな」

「そうですね。本当に」

「それは」

「こんな時に空軍も戦車もないからな」

ピットは言いながら舌打ちした。

「せめて装甲車でもあればな」

「楽なんですがね」

「一両でもあれば」

「全く。欲しい時にないな」

また言うつピットだった。舌打ちが続く。

「兵器はな」

「そうですね。確かに」

「それは言えますね」

兵士達もだ。彼のその言葉に頷く。

「それで妙に邪魔になる時にあるんですよ」

「余計な時に」

「そういうものだな。しかし言っても仕方ない」

ピットは愚痴を言うのを止めた。

「この戦いが終わったらな」

「はい、終わったら」

「その時は装甲車だけでなく戦車も頼むか」

「そうですね。それじゃあ」

「そうしますか」

こんな話をしてだ。それからだった。

まずはだ。狙撃兵達が構えた。めばしい敵兵に照準を合わせてだ。狙撃した。

それで何人かが倒れた。だがそれによつてだ。

ドイツ軍の将兵達が一気に散開した。そしてだ。

水車の方に向かってきた。今彼等がいる場所だ。

それを見てだ。ピットはまた言うのだった。

「来たな」

「はい、今の狙撃で気付きましたね」

「我々に」

「間違いなく」

「こうだ。誰もがそれを見た。」

そしてそのうえでだ。ピットはまた命令を下した。

「いいか、やるぞ」

「はい、わかりました」

「それでは」

こうしてだった。彼等はだ。

迫る敵兵に攻撃を開始した。敵兵も散開したうえで攻撃を仕掛け  
てきた。

水車に次々と銃弾が当たる。物陰に隠れているのが幸いした。

だがそれでもだ。攻撃をする時にだ。

銃弾を受けてだ。倒れる兵達も出ていた。

「隊長、マックロード上等兵が倒れました!」

「怪我は?」

「右足を撃たれました」

そこをだとだ。トランシーバーからの報告が述べていた。

## 第四章

「とりあえず寝かしています」

「そうか」

「はい、今のところ命に別状はありません」

「すぐに手当てをしる」

彼はすぐにこう命じた。

「いいな、すぐにだ」

「わかりました」

報告をする兵士もこう答えたのだった。

「それでは」

「他に負傷者はいるか」

「サウザンドリバー二等兵が戦死です」

戦死者の報告もあがった。

「頭を撃たれました」

「そうか、わかった」

ピットは苦い顔になった。そのうえで答える。

彼は水車の窓から敵兵を見ながら指揮を執っている。その窓のところにまだ。銃弾が次から次に来る。ドイツ軍の攻撃は激しい。

「他に戦死者は」

「スモールファースト一等兵が戦死です」

また報告があがった。

「今死にました」

「そうか、彼もか」

ピットの声が沈痛なものになる。しかしだった。

だがそれでもだ。敵の攻撃は続く。何時しか水車を囲もつとしていた。

ピットもそれを見た。そうしてであった。今度は部下達にこう述べた。

「いいか、今度はだ」

「今度は？」

「今度はといいますと」

「敵は今まで手榴弾を使ってきていないな」

銃撃だけである。彼が今言うのはこのことだった。

「そうだな」

「そういえばそうですね」

「確かに」

部下の兵士達も言われて気付いた。

「それはないですね」

「手榴弾を使えば」

どうなるかだった。兵達が言う。

「それこそこんな水車なんか一発ですけれどね」

「一撃で吹き飛びますけれど」

「それはしてきませんね」

「ないな」

そこからだ。ピットはこの結論を出した。

「連中手榴弾は持っていないな」

「切れたんですかね、手榴弾」

「向こうは」

「連中はもう弾薬も残り少ない」

装備自体がだ。困窮してきていたのだ。さしものドイツ軍も西部と東部、それにイタリアで敗北が続いてだ。備蓄がなくなってきたのだ。

「だからだな」

「手榴弾がない」

「そういうことですね」

「あればすぐに使っている」

こつも述べるピットだった。その間にも銃撃は来る。丁度今一発の銃弾が彼の目の前をかすめた。迂闊に窓から顔を出すこともでき

ない。

だがそれに怯まずだ。彼は言うのだった。

「それならな」

「はい、それなら」

「こつちがですね」

「そうだ。散開しているがな」

敵がというのだ。

「それでもだ。手榴弾があればな」

「使う」

「そうですね」

「あるものは何でも使う」

これが軍の鉄則だった。

## 第五章

「そういうことだ」

「ええ、それじゃあ」

「すぐにですね」

「手榴弾を」

「各員手榴弾を持って」

「こつ部下達に命じた。」

「そしてだ。敵兵に向かって投げろ」

「了解」

「わかりました」

「すぐに返事が返ってきた。」

「それならです」

「今から」

「戦争でものをいうのは」

「何かとだ。ピットは呟くのだった。」

「数とだ」

「それとですね」

「装備ですね」

「その二つだからな。それがあればな」

「勝てるというのだ。それは彼はよく知っていた。何故ならだ。」

「アフリカでもそれで勝つたな」

「あの時のドイツ軍は今よりも強かったですけれど」

「それでもですね」

「勝てましたし」

「それなら今も」

「アフリカでの激戦を考えればだ。今の戦いもなのだった。」

「楽にさえ思えた。それでだった。」

「彼等は落ち着いてだ。そのうえで手榴弾の信管を外してそうして」

だった。水車、彼等が護りにしているそれを取り囲むドイツ軍の將兵達に対して投げるのだった。

手榴弾はすぐに彼等のところでだ。爆発してだった。耳を覆っているドイツ軍のヘルメットが吹き飛び銃が投げ出される。それでだった。

彼等はその数を大きく減らした。しかしそれでもだった。怯むことなくだ。まだ戦おうとしていた。それを見てだ。

ピットはだ。いささか感嘆を込めてこう言うのだった。

「しぶといにも程があるな」

「そうですね。負けているというのに」

「装備も劣っていて数も減ったのに」

「まだ戦いますか」

兵達の言葉にもだ。ピットと同じものが入っていた。

「ドイツ軍というのは」

「本当に粘り強いですね」

「全くです」

「この連中が味方だったらな」

ピットはまだ窓のところに撃ち込まれるその銃撃を見ながら述べた。

「どれだけ楽だったか」

「そうですね。本当に」

「頼りになりますよね」

「こんな連中」

「少なくともヤンキー共よりはずっといいな」

アメリカ軍のことだ。同盟国であり今も共に戦っている。しかしなのだ。

両者の中は悪かった。実を言えばだ。共同作戦にしてもだ。何かあるとお互いにいがみ合っていた。アフリカ戦線以来常にであった。だからだ。ピットも今こう言うのだった。

「下品で威張り散らしているあの連中よりはな」

「そうですね。完全に自分達だけで戦争していると思ってますからね、ヤンキーは」

「俺達はただのおまけだそうで」

「スパム程にも役に立たないとか」

缶詰の加工された肉である。連合軍はやたら食べている。

「言ってくれますから」

「そんな連中に比べればですね」

「ドイツ軍の方がずっと役に立ちますね」

「全くですよ」

そんな話をしながらまた手榴弾を投げる。派手な爆発が幾つも起こりドイツ軍の将兵達は再び吹き飛ばされ数を減らす。しかしそれでもまだ彼等に攻撃を加えてくる。

## 第六章

イギリス側の将兵達も次第に死傷者を増やしていく。ピットも遂に。

「くっ……」

窓から覗いている時にだ。右手を銃弾がかすった。それだった。軍服が破られ血が流れる。それに顔を顰めさせる。

「狙いが甘いな」

「隊長、大丈夫ですか」

「怪我は」

「だから狙いが甘い」

不敵な笑みになってだ。こう気遣う部下達に言ってみせた。

「イギリス軍の人間を倒したければ頭を狙え」

「そういうことですね。それじゃあ」

「大丈夫ですね」

「ああ、これでいい」

兵士の一人が差し出した包帯を自分で巻いてだ。そうしてだった。そのうえでまた指揮を執る。彼自身もライフルを手に取って狙撃する。一進一退の戦いが続く。それは暫く続くかと思われた。

しかしなのだった。ここだ。水車の方だ。

戦車や装甲車が来た。それは。

「ヤンキーが来ましたよ」

「ほら、あの連中が」

「何か偉そうに来てますね」

「正義の味方だな」

ピットは窓から彼等の姿を見てだ。シニカルな笑みで述べた。

「遅れてやって来たって訳か」

「美味しいところ取りですね」

「全くヤンキーってのは」

「何処まで西部劇のつもりなんだか」

「ふざけた奴等ですよ」

「そうだな。それでもな」

ピットはだ。将校らしく冷静に戦局を見てこつも述べた。

「これで我々はな」

「勝てますね」

「生き残れますね」

「そうだ。それは間違いない」

それはだというのである。

「それだけはヤンキーに感謝しておこつ」

「素直にですね」

「そうしておきますか」

そんな話をしてだった。彼等はここでさらに踏ん張った。そしてその突如として姿を現したアメリカ軍を見てだ。ドイツ軍も撤退した。流石に戦車や装甲車が相手ではだ。歩兵だけでは相手にならなかった。

## 第七章

こうしてピットと彼の率いる中隊は生き残った。しかしだった。水車の周りにはだ。イギリス軍とドイツ軍の将兵達の遺体、そして負傷した者達が残ったまま転がっていた。生きている者は苦しい声をあげている。

それを見てだ。ピットはこう言うのだった。

「勝ったことは勝ったけれどな」

「そうですね。のどかだった光景が台無しですね」

「これじゃあ」

「酷いものだな」

ピットの声はうんざりとしたものになっていた。

「全くな」

「そうですね。こつちも随分やられました」

「戦死者は十人です」

まずは戦死者から話される。

「負傷者は十七人」

「派手にやられましたよ」

「そうだな。水車に護られていてもな」

それでもなのだった。彼等はそこまでやられていた。

そしてだ。周りを見るとだった。

あちこちに手榴弾の爆発で派手な穴が開いている。緑の平野にだ。

黒い異様な穴が無数に空きた。無惨な姿を見せていた。

そして水車達もだ。銃撃によりだ。

あちこちに弾痕がありボロボロになっている。羽根もだった。

「もうこの水車どれも使えませんか」

「修理が必要ですよね」

「絶対に」

「そうだな。そうしないと駄目だな」

ピットもこう兵士達に答える。その水車を見ながらだ。その間も水車達は動いている。そしてであった。水車がだ。動きを止めた。その止めた時だった。十字の白い羽根がだ。十字架の形になった。ピットはそれを見てあることを思い出した。それが何かというところである。

彼はだ。それを言葉に出して言った。

「そついえばな」

「そついえば？」

「何かありますか？」

「いや、オランダで人が死ぬとな」

彼等が今戦っているだ。そのオランダの話だった。

「水車を十字架にしてな。今みたいにな」

「今みたいですか」

「そうするんですか」

「それで死者の冥福を祈るらしいな」

生き残った兵士達にこんな話をするのだった。

「そうらしいな」

「それじゃあ今ですね」

「そうですね」

兵士達もここで言った。

「今の俺達ですね」

「ドイツ軍も含めて」

「戦死した人間のですか」

「冥福を祈ってるんですか」

「だからだ」

また言うピットだった。

「こうしてな。十字になつたんだ」

「そうなんですか。俺達のせいでボロボロになつた水車が」

「俺達の為にですか」

「因果なものだな」

ピットはその無惨な姿になった、羽根にさえも所々に弾痕のある水車達を見上げながら述べた。彼等は今全員水車の外に出ている。

「戦争ってというのはな」

「そうですね。のどかな光景が忽ちこんな有様になって」

「何もかもが壊れて死んで」

「そうなつてくんですからね」

兵士達もだ。しんみりとした口調になって述べた。

「それが戦争ですね」

「つまりは」

「そうだ。けれど水車は」

その十字になった羽根を見てだ。また述べたのだった。

「こうして私達を鎮魂してくれる」

「その因果な俺達をですね」

「そういうことですか」

「そのことは。感謝するしかないな」

こう話してだ。その荒れ果ててしまった水車達を見るのだった。

水車達は何も言わない。だがそこにはだ。無言の言葉があるのだった。

水車の側で 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4195v/>

---

水車の側で

2011年8月2日03時28分発行